信玄

武田八洲満

信玄

武田八幡宮

信玄

定価八〇〇円

昭和四十九年二月十五日　印刷
昭和四十九年二月二十五日　発行

著者　武田八洲満（やすみ）
編集人　浜田琉司
発行人　朝居正彦
発行所　毎日新聞社
〒一〇〇　東京都千代田区一ッ橋
〒五三〇　大阪市北区堂島上
〒四五〇　名古屋市中村区堀内町
〒八〇二　北九州市小倉区紺屋町

印刷　図書印刷
製本　佐久間製本

0093-400091-7904

信玄◇目次◇

一之章　志賀城　5
二之章　塩尻峠　55
三之章　釜無川　101
四之章　川中島　153
五之章　三方原　201
あとがき　256
参考地図　258

裝幀　鈴木朝生

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

信玄

（しんげん）

一之章　志賀城

一

その日、甲斐の将、甘利備前守虎泰の領内百姓、じんべえの妻が死んだ。生後四十日の男子ひとりを残している。じんべえはあたりかまわず泣き散らし、赤児はまだ視点の定まらない目で、そのような父親を見ていた。

前年、甲斐は百年に一度と言われる飢饉にみまわれている。二度の大嵐がさらに甲斐の百姓を叩きのめしていた。手持ちの食糧はなにもない。とむらいは餓死者のそれとかわらず、浅い穴になきがらを入れ、じんべえが土をかけるだけで終っている。僧を呼ぶ金のあるわけがない。僅かに甘利の家臣で在村の武士、鍋山泰親の手の者が香をひとつかみ、小さな白い布に包んで持ってきただけである。

このとき、じんべえは初めて子に名まえを与え、小さく呼んでいた。とうすけである。妻の名をとうと言った。じんべえにほかの名は必要がない。香烟が流れる。じんべえは香より米がほしかった。米さえあれば貰い乳ができる。甘利の領地は甲斐の西はずれにある。草原の多い土地であった。

じんべえはこのとき、甲斐にいくさ触れが出ていることを知らない。

同じ日、甲斐の東になる初鹿野源次郎預り地の山で、たいぞうが妻に話しかけていた。

たいぞうはきょう、鹿の皮五枚を持ち、山をおりて源次郎さま屋敷に行く。粟一斗と取りかえて貰うつもりである。なにかほかに欲しいものはないか、たいぞうは妻に問いかけている。いつも背にする短いけもの弓をゆすり、赤い布でも貰うてこようかいと笑って尋ね、そうか、もう塩が切れておったか、と自分で答えていた。

妻が答える筈がなかった。たいぞうの妻は六年まえ、飢えた猪に追われ、谷に落ちて死んでいた。墓はたいぞうの小屋の中にある。墓を小屋にはこび入れたのではない。墓を覆うようにたいぞうが小屋を建て、ともに住むようにしたのである。ひとの頭ひとつほどの丸い石が墓である。名も経文も刻まれていない。

たいぞうはそれでも墓と対話する。あかるい声が沢の水音と織りなして山あいにこだましていた。ふたりで笑っているようにきこえる。山のみどりが濃い。

天文十一年六月十四日である。

武田晴信は明日からの諏訪進攻を前にし、不安を棄てきれないでいた。なかまで陽の届かぬ躑躅ヶ崎の館の暗がりにうずくまり、不意に立って白い直垂姿を日光のもとにさらしたりした。

「落ち着き召されよ」

腹心の家臣、板垣信形が声をかけるが、天を仰ぐ晴信はすぐに答えないでいた。

おまえの考えていることではない、尖った声が返ってくるのは再び暗がりに戻ってからである。晴信、のちの信玄である。このとき二十一歳、ちょうど一年まえ、晴信は非道を問われた父信虎を駿河に放逐している。諏訪進攻のいくさ触れは、晴信自立後はじめてのいくさ触れであった。

いま晴信には、不安がふたつある。

「騎馬八騎、足軽十五」

初鹿野源次郎は長い評定のはてに、家の者に命じていた。解き放たれたように、人が動く。金具の触れあう音、馬のいななきがせまい谷間にひびく。いくさ支度であった。槍が光っている。

統領交代後一年である。新しい統領晴信どのの器量はまだわからない。騎馬十六、足軽三十がさきの統領のときの軍役であった。だが、このたびは半数しか出すつもりはない。初鹿野の領地は山をはさみ、武蔵、相模と接している。その方面の統領、北条氏康どのの動向も気にとめなければならない。うかつに動けなかった。甲斐はまだ新しい統領になじんでいない、ほかの国人が晴信どのをどのように評価しているのかもわからなかった。

「流れを見るばかりだ」

源次郎はいくさ触れを知ると、まずそう言っている。卑怯ではない。国ざかいに住む者が生きのびるためには、大勢に順応するほかなかった。少数の兵しか持たぬ者の知恵である。

「諏訪を討たるるに異存はない」

源次郎は家の者が進攻の不要を言い、北条とのかねあいを口にしたとき、それだけは強く言った。晴信どのは父信虎どのを懸命に否定しようとなさっているのであろう、幼ささえ感じとれるほど、ひたむきなのがわかった。

だが、晴信どののその意図を、どれほどの数の国人が気付いているか、わからなかった。気付いていても、兵を出すかどうかは別のはなしである。晴信どのは一国を手にされたおつもりであろうが、国人たちはまだ新しい統領に心服しているわけではない。傍観しているとさえ、言ってよかった。

甲斐の国人は土塁にこもり、それぞれの生活圏を持っている。よそからの干渉をもっとも嫌った。だからさきの統領の、上からの武威の統一をはね返し、進んで追放。それが新しい統領の支持につながるものでないことは、言うまでもない。晴信どのはそれにお気付きであろうか。

「晴信どのご器量拝見」

源次郎の心の中にもそのような思いがある。さきの統領のかげになり、これまで直接の指揮をとられたことのすくない晴信どのである、とるに足りぬ統領であれば、すぐにでも武者と足軽を引き揚げさせるつもりであった。

ただ、諏訪を討つ爽快さは、源次郎にもある。諏訪を討つことは、さきの統領をまっ向から否定することであった。よくぞ気がつかれた晴信どの、源次郎は思う。八騎、十五人の足軽は源次郎から晴信への祝詞でもあった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「いくさにともせよ」

いきなり言われ、たいぞうは動転していた。鹿の皮五枚を置き、粟を貰おうと手をのばしたとき、源次郎さまが声を出されたのである。当番の足軽ひとりがいくさ触れの前に山に入り、戻ってこない、代りをせよ、いやおうがなかった。

たいぞうはともかく一度小屋に帰してほしいと懇願し、ようやく許されていた。熊が留守中の小屋を荒さぬよう、戸締りをする必要もあった。積み上げた薪を猿が崩す心配もある、目のまわる忙しさであった。米を作る百姓がいくさにとられるとき、どれほどあわただしく、迷惑を受けるか、よくわかっていた。

月があがり、ようやくすべてが終っていた。思いがけぬ一日であり、疲れを感じている。源次郎さま屋敷の前にはすでに篝火が焚かれていた。馬がはね、人が動いている。そのたびに火が飛んだ。たいぞうは火のかげに身を置く。

大丈夫か、長いこと動かなかったから、おどろいているのではないか、たいぞうは低く背中にささやきかける。背中はなにも答えない。赤児を背負うように、たいぞうの背には妻の墓石があった。墓は妻が生前にまとっていたねずみ色の着物と木の皮にくるまれ、荷枠にしっかりとくくりつけられてある。いくさのあいだ、別れていることはできなかった。篝火を受け、墓石は生きもののようにまたたいている。

躑躅ヶ崎館も篝火に包まれていた。久しぶりの合戦とあって手順が乱れるのか、人と人とがぶつかりあい、声がするどくなっている。館の中には武田直参衆しかいない。兵を合わせても九百、晴信は駒井高白斎から報告を受けていた。父信虎のとき、最高二万を数えた兵数はどこにもなかった。

板垣信形は平然としている。はじめはいずれもこのようなもの、なににせよ初のいくさ触れ、一年もあいだを置いてのこと、やがてはみな目ざめましょうぞ、一年、晴信さまは無為にすごされたのではない、自信をお持ち召され、信形は動かなかった。

晴信はいらだっている。いくさ触れの反応はすくない。父を追放してから一年、晴信は甲斐をみつめてきていた。信形の言うように、無為にすごしてきたわけではない。だが、初めてのいくさ触れのあとの国人たちの沈黙は不安であった。やはり父以上に自分は出られぬのか、気の滅入る思いであった。

それに晴信にはもうひとつの屈託がある。この日、それがあきらかになろうとしている。医師は妻の部屋に入ったまま出てこない。長い時が流れていた。

妻は昨年秋、晴信の男子第二子を出生している。晴信はためらうことなく次郎の名を与えていた。甲斐武田の男子第一子には太郎、第二子は次郎、以下三郎、四郎と数字を与えることになっている。嫡子の太郎は既に五歳に達していた。次郎の誕生は遅すぎたと言ってもいい。事実晴信は第二子の出生に驚喜していた。しかし、医師は不審を言っている。やがてそれがわかる筈であった。夜が更けていた。

初鹿野源次郎の手勢は夜のうちに勝沼までおりてきている。十四日の月が真円に近く、中天にかかっている。源次郎は夜明けまでここで待て、と命じていた。青い月の光の下にひろがる甲斐の野のどこにも、軍勢の動く気配がみられない。八騎と十五人は草むらの中に沈んでいた。たいぞうも墓とともに草をしとねにする。

板垣信形は身をおこした。篝火はかわらず燃えている。信形はたしかに鳴咽を聞いた。うたた寝のあいだの出来事である。さきほど晴信どの従者のひとりが部屋に入り、すぐ出て行ったのは記憶している。鳴咽はそれからであった。信形は首をめぐらす。

部屋の中央に晴信が仁王立ちになり、手放しで泣いていた。これがさだめか、これで生きよというのか、声がとぎれて出ている。顔面は蒼白であり、指さきがふるえていた。息をのみ、信形は晴信を見つめるばかりである。

事は第二子次郎についてであった。晴信は従者の伝える医師の言葉に身をふるわせ、まちがいござらぬ、と締めくくられるとわれを忘れて立ち上っていた。

次郎は統領交代の直後に誕生している。いわば晴信自立の象徴であり、次郎の年齢はそのまま晴信の守護在任の年数となった。次郎は晴信の年輪になる。常にかたわらに置き、成長を楽しみたかった。偏愛ではない。次郎の成長におのれを見るのだ。

だがいま、晴信は次郎にもうひとつの宿命を見る。次郎は甲斐とともに浮沈するさだめを持っていた。甲斐武田家が隆昌である限り、次郎は無事であり、甲斐が危機に瀕したとき、次郎はいのちを終えるであろう。医師はそれを告げたのである。

次郎がその生を守りぬくためには、晴信の勝利が絶対に必要であった。甲斐武田家の安定がすべてになっている。第二子次郎は、生涯ひとり立ちできず、周囲の庇護を受けねばならぬからだであった。

「てだてはござりませぬ」

医師は言ったという。次郎は武家の、戦えぬ子となっていた。義父追放の心労と、飢饉による母体の不安定が原因であろうという。

次郎は盲目であった。生後一年を経たいま、光を得る見込みはまったくない、医師は晴信に告げている。

次郎は既によく笑い、言葉に近い声を出す。晴信の近づくのを察し、手をさしのべてかかえよと動作を見せる。その次郎が盲目であった。晴信は嗚咽を続ける。自立後第一戦を迎えようとする前夜、その悲しみを知るのである。しかし、晴信は悲しみに耐えねばならぬ。

のちの話であるが、次郎はまさしく甲斐と消長をともにした。天正十年三月十一日、隆昌を誇った甲斐が武田四郎勝頼の死とともに終焉を告げたとき、盲目の次郎はみずから居館に火を放ち、その一

生を終っている。自殺である。

たいぞうは妻の墓の襟を合わせ、身をおこす。朝焼けが東の空にある。南には富士が聳え、正面に白根山、農鳥岳が朝陽を浴びて真紅に輝き、甲斐の野は露を五彩にきらめかしている。初鹿野源次郎はゆっくり立ち上って西を凝視した。西に見る一線上に、晴信どの居館、躑躅ヶ崎館があり、信州往還を経て、諏訪がある筈であった。朝焼けが赤い。

二

晴信は父を放逐したあと、急速に解体の傾向を見せる甲斐のため、三つのことをしている。初鹿野源次郎が気がついたように、突然の統領の交代である、割拠独立を体質とする甲斐の国人たちは、箍をはずされた桶のように、それぞれが乱雑に散っていた。

晴信は初め、事のない統領の交代に安堵し、国人たちの動向に気がつかなかったようだ。直ちにすべてが戦力となり、自分の指揮下に入るものと信じていた。天文十年六月十四日の追放、十六日の公表、あと数日は守護の座に満足していたと言える。

なにがきっかけになったかはわからない。おそらくは国人の逃散でもあったのではないのか、統領の座が安定していないのを知る。二十八日の家督相続の儀式までに晴信は無事と信じていた錯覚に気

がついたと思われる。甲斐の解体をくいとめ、再び統一をはかる困難に思いつくのである。

甲斐の再建のために父の採った武威による統一は許されない。国内に緊張を強いることは国人の反感を招き、再び内乱の気配、そして統領追放がはてしなく繰り返されるであろう。甲斐は自滅するばかりである。晴信は苦悩したようだ。甲斐に残されているのは収奪つくされた土地と、毎年のように氾濫する笛吹川、釜無川の白く剝げた河原、それに飢えにさまよう人の群れだけである。国人の心を動かし、再び躑躅ヶ崎館に目をむけさせる言葉も持たなかった。

幸いなことに天文十年六月からあくる年六月までちょうど一年、甲斐は国外からの侵略を受けていない。この年全国大飢饉であった。諸国の民衆には不幸であっても、為政者には幸運となっている。継続した戦乱のほか、新しい侵略をおこす余裕がなかったのである。晴信は全力を国内にむけることができていた。

合議もあったであろう、板垣信形をはじめ駒井高白斎などが意見を述べたと思われる。しかし、おそらくは晴信のうめきの中から湧いた勘ではないか。追いつめられた者だけが持つ意外の発想である。あるいは晴信が諦めて一切を放棄しようとして気がついた譲歩かもしれない。

晴信と国人たちが共通して持つ理解点を発見したのである。もともと割拠しようとする国人と、統一しようとする晴信は相反する異質のものであった。その異質に共通する分母があった。この分母としての理解点は、その後の晴信の、長く続く甲斐統治の姿勢となっている。諸族連合とも言える甲斐軍団の成立につながり、俗説ではあるが、晴信と諸将を並列に置く武田二十四将論の根拠ともなっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com